

平成18年度 事前評価調書

機 関 名 アイヌ民族文化研究センター

研究責任者 研究課長 古原 敏弘

研究担当者 研究職員 小川 正人

課題番号	ア文研一般1801		研究課題名		アイヌ文化研究を側面から支えた人々の歴史に関する調査研究		
課題担当者	3 人		研究区分	研 究	試 験	調 査	分 析
共同研究機関 (協力機関)	なし						各種施策等との関連性
研究期間及び 所要見込額(千円)	19 年度 ~ 24 年度	初 年 度 (200)	次 年 度 (300)	次々年度以降 (950)	各種施策等との関連性		
研 究 概 要	○研究背景(重要性・緊急性【a・b・c】) 具体的なニーズの有無【a・b・c】) ・アイヌ文化研究は、長年にわたってごく少数の研究者によって担われ、研究条件や研究成果の公刊等の環境も必ずしも十分とはいえない状態であったことは比較よく語られる。こうした状況の中で進められた研究の歴史を明らかにすることは、今日のアイヌ文化研究の依って立つ基盤を省察する上でも重要な課題であると考えられる。このような問題に関わっては、研究史そのものや研究者あるいは研究に協力した伝承者などについては比較的关注が向けられ、いくつかの著作も見られるが、なお欠落しがちな点として、こうした研究をより実務的な作業において支えた人々、あるいはこうした調査研究の条件や体制の整備に関わった人々の記録である。こうした人々は、一般的には歴史や文化の研究で直接の調査対象とはなりにくい、アイヌ文化研究の歴史にとって貴重な記憶や体験が刻まれていることは十分に考えられる。 ・このような、いわゆる側面からアイヌ文化研究を支援する役割を果たした人々の記録は、一部では既に幾つかの聞き取り記録が見られる(北海道新聞連載「私の中の歴史」、北海道総務部「北海道開発功労者の声」など)し、自ら回想録を記した人もいる。しかしながら、いずれも量的には多いものではなく、聞き取りなどもアイヌ史・アイヌ文化研究史の記録として意識的・体系的に行われたものではない。このような貴重な体験談の多くは、断片的な逸話だったり、近縁の人々の記憶の中だけに残るものになりがちである。こうした人々や出来事に関する記録を調査し集積していくことは、アイヌ文化研究の歴史の一端を明らかにする上で重要な意義を有する。 ○研究目的 ・重要なアイヌ文化研究の事業において調査に同行・協力した人々、研究条件の整備や出版事業の支援などを行った人々について、既存の記録資料から情報を集約するとともに、新たな文献調査や聞き取り調査を行い、その事跡や周囲の状況などを明らかにする。 ・対象とする時期は、現在のアイヌ文化研究の直接の基盤をかたちづくった時期、すなわち、日本におけるアイヌ文化研究において専門の研究者による調査研究が行われるようになった1920年代からアイヌ文化に対する関心が比較的高まりを見せ始める1960年代までを中心とする。 ○研究内容(新規性・独創性【a・b・c】) 1 予備的調査(これまでの情報の収集) これまでに知られている情報、公刊または放送された情報について、既存の文献や聞き取り記録、ドキュメンタリー番組などを調査する。これらのデータをもとに、特に掘り下げて調査することが有益と思われる人物やこととを選び、関係者の聞き取り調査や文献調査の可能性を調査・検討する。 2 文献調査及び聞き取り調査 ○年次別目標 平成19年度 予備調査 既存の文献、聞き取り記録、ドキュメンタリー番組などからの情報の集約を行うとともに、面接調査が可能と思われる関係者に対する予備的協議を行う。 平成20～23年度 文献調査及び聞き取り調査 それぞれの事跡について、関係する文献(公的な調査事業の場合は公文書なども含む)や関係者からの聞き取り調査を行い、具体的な経緯や周囲の状況などを明らかにする。 平成24年度 調査結果のとりまとめ ○研究計画の適切性【a・b・c】) ・断片的な逸話をもとに歴史を調査することから、6ヶ年というやや長期にわたる研究期間を設けていることは適切である。 ・対象時期の関係者で存命の方は少なくないが、いずれも70歳代以上の高齢者となっていることから、聞き取り調査を行うことについては緊急性が高い。 ・本研究課題の内容は、アイヌ史研究とアイヌ文化研究の接点にあたる領域であり、歴史と文化それぞれの担当職員を有する専門機関である研究センターが行うに相応しい課題である。						
研究の成果と活用策	○期待される成果 ・本調査研究の成果は、収集した事例ごとに聞き取り記録や関係文献資料などをまとめた報告書のかたちでとりまとめる予定である。 ・このような調査研究報告の公刊により、現在のアイヌ文化研究に至るまでのアイヌ文化に関わる様々な歴史の一端が明らかにされ、アイヌ文化の理解の促進に寄与することが期待される。 ○実現の可能性【a・b・c】) ・当研究センターのこれまでの調査研究事業を通じて、収集すべき事例については既に一定のメドがあり、また関係機関等の協力も期待できることから、実現の可能性は十分に見込むことができる。 ○成果の活用策、活用の可能性(活用の可能性【a・b・c】) ・特に本調査研究が対象とするような歴史が知られることを通じて、現在様々な地域や立場でアイヌ文化の研究、学習、伝承等の活動に携わっている人々に対して、自らの活動の意義や役割を再確認する契機や素材を提供することができ、こうした活動の振興に寄与することが期待される。						
【自己評価】	○道が取り組む必要性【a・b・c】) ・アイヌ文化の保存伝承事業、調査事業においては、北海道及び道教育委員会も中心的役割を果たしてきている。従って、こうした事業や営みの担い手の歴史を明らかにするのは道の事業として意義があり必要性が高いと考える。 ・本研究課題のようなテーマは一般的な研究テーマとしてはあまり着目されず取り上げられにくい基礎的な分野に属することから、道という公的な機関における基礎的調査研究事業として進めることについて適切性が高いと考える。						
【総合評価】	【意 見】本研究はアイヌ文化自体を対象にした研究ではないが、研究条件が十分でなかった頃からアイヌ文化研究に取り組んできた人々の歴史はアイヌ文化の保存伝承を支えてきた人々の歴史でもあり、このような人々を側面で支えてきた支援者等の活動を記録することにより、将来的に過去のアイヌ研究の検証や補足的資料としての活用が図られることから有用な研究課題であり、早期に取り組むことが望ましい。なお、調査記載のとおり関係者が高齢であることから、この点に配慮し、聴取方法を工夫するなど早期に進められたい。						